



日野原重明記念

## 「新老人の会」東京 会報

Keep on going!

Vol.5/No.3

2023.7

## 命の重さの継承とは

日野原重明記念「新老人の会」東京 顧問 早乙女 愛

日野原先生に初めてお会いしたのは二〇〇八年十二月。父と聖路加国際病院の理事長室を訪ねたときのことだ。とても寒い日で、一階のロビーで毛皮のコートを着た女性とすれちがったのを覚えてい



る。私は映像編集を生業としており、夫はカメラマンである。その日、父の取材を記録するために同行していた。父は青ざめていた。寒さでも緊張のせいでもない。数カ月前に私たち家族は母を失ったばかりであった。七つ下の伴侶の突然死は、父には相当こたえた。沖繩在住だった私は東京に戻り、役割不足を承知でしばらく実家の隣に住んでみたが、歩くこと食べることでやると、という日が続いた。そんなある日、父が館長を務める東京大空襲・戦災資料センターに一枚の伝単（米軍による宣伝用ビラ）が寄贈された。聖路加国際病院が描かれた珍しい伝単である。伝単を日野原先生に届けるついで、取材をさせていた

滞っていた父の日常は、一枚の伝単によってようやく動き始めたのだ。理事室は温かかった。迎えてくれた先生はしっかりした肩幅にびったりのスーツを身に着け、とても大きく見えた。「昨日はね、夜中二時まで仕事をしていたんですよ。」と言う先生に疲労の影は見えなかった。好奇心全開、前のめりになって伝単を見ながら、ご自身の空襲体験について語り始めた。東京大空襲を体験し、十代で作家になり、戦後は数多の体験者から聞き取りをし、すっかり東京空襲の語り部役となった父であるが、空襲当時はまだ十二歳の子ど

もだった。逃げるしかなかった父は、向島区（現・墨田区）の自宅から水を求めて隅田川へ逃げ、白鬚橋の袂で命拾いをした。同じ夜、当時三十代の日野原先生は「大東亜中央病院」と改名させられた聖路加国際病院で、負傷者の治療に当たっていた。医師による救護の証言は貴重で、今も戦災資料センターに常設展示されている。被災地図で確認すると、隅田川を真ん中にして、北にいるのが父、対岸の南にいるのが先生だ。二人がいた位置の間を、赤色の焼失区域が埋め尽くす。その夜、十万人が死んだのだ。私は不思議な思いで二人の対話を記録していた。初めて会ったはずなのに、まるで久しぶりに再会したような親密な時間が流れていた。戦後六十余年を経た医師と作家、立場は違えど同じ心境だったのではないだろうか。それは生き延びた者だけが感じている、失われた十万の命の重さである。別れ際に「あなたはまだまだこれからだよ。」と先生に言われ、「はい」と返事をした父の頬はすっかり上気していた。一時は人生の重心を失いかけた父であるが、前を歩く人を見つけたのだと私は思った。それから十年以上、戦災資料センターの館長を勤め上げ、よく書き、語った。講演の折には必ず「日野原先生に比べれば私な

んぞは青二才」と挨拶をしていた父は、享年九〇歳で死去した。先生も父も亡くなり、前を歩く人についていけばよかった時代は過ぎた。大量の資料と記録のなかに彼らの足跡は残されている。死者の命の重さぶん、足跡はくつきりと深いのだ。

早乙女 愛 / Ai SAOTOME

プロデューサー・映像編集者

1972年東京生まれ。幼少の頃より、父、作家の早乙女勝元の取材旅行に同行し、国内外の戦跡をたずねて育つ。同志社大学文学部哲学及倫理学専攻卒業。2001年、中米コスタリカを舞台にしたドキュメンタリー映画『軍隊をすてた国』（山本洋子監督）を初プロデュース。映像制作会社を設立後、PV、テレビ番組、映画、展示映像へ撮影技術を提供。2015年、東京大空襲証言映像マップの制作において第19回文化庁メディア芸術祭エンターテインメント部門審査委員会推薦作品受賞。著書に『海に沈んだ対馬丸』（岩波ジュニア新書）ほか、映画評を多数執筆。東京大空襲・戦災資料センターの展示映像のほか、早乙女勝元資料室「焚火アーカイブ」を制作中。後世に残す資料の保存と活用を、アナログとデジタル双方で実践している。（尚記録同人代表。

<https://vimeo.com/goldenrecord>



# シニアこそデジタルを！



「新老人の会」SSA代表  
デジタル推進委員アンバサダー 牧 壮

デジタル庁は、「誰一人取り残されない、人に優しいデジタル社会」の実現に向け、二〇二二年五月、デジタル機器やサービスに不馴れな方をサポートするデジタル推進委員及びデジタル推進呼びかけ員の制度を発足させました。その周知普及のためのアンバサダーとして、当時のデジタル大臣牧島かれん氏より、私を含む三名（若宮正子さん、浅川智恵子さん）が任命されました。せっかくガラケーからスマホに変えたのに通話にしか使えていない、そういう方がまだまだ多くいらっしゃいます。そこで今回から、「新老人の会」東京会員でデジタル推進委員の伴克子さん（福岡在住）に「初心者のためのスマホ講座」を連載していただくことにしました。

【スマホへようこそ】  
皆さん、こんにちは。デジタル推進委員の伴克子です。福岡で、デジタル庁や福岡市・大学などと連携し、シニアの方たちにスマホの使い方講座をしています。  
講座の最初によく言われるのが「スマホは難しい！よくわからない！ガラケーでいいわ！」そして「そもそもデジタルって何？」のお声です。確かに！と思うられるお気持ちもよくわかります。

iPhoneが二〇〇七年に出て十六年。この間のスマートフォン進化のスピードは尋常ではありません。生活や仕事にも影響を与え、人々の行動すら大きく変えています。「必要なのはわかっている、でもよくわからないのよね」というお声が聞こえてきました。では、スマホの基本のキをお伝えします。

## 【スマホの基本のキ】

スマホの操作は画面を触ることから始まります。指で画面をポンと押すことを「タップ」。指をつけたまま左右上下に引くことを「スワイプ」。また、二本の指を使って画面を大きく小さくすることを「ピンチアウト」「ピンチイン」。写真の画面を拡大している場面を「ズームイン」のことです。画面の拡大はスマホを横向きにする事でもできます。小さい字が見えにくくなると、画面が大きくなるのは大変便利です。例えば書いてある字が小さくてわからない時、私はスマホのカメラで写して、写真を拡大して何が書かれているのかを確認します。



画面に並んでいる小さな四角の絵は「アイコン」といいます。「アプリ」を起動するためのボタンです。「アプリ」とは、スマホでいろいろな事ができるようにするための道具です。写真を撮る事に例えると、写真のアイコンを押すと、写真アプリが立ち上がりカメラとして使えます。アプリは自由に入れたり消したりできます。無料も多いのですが有料もあります。

## 【無料アプリ LINEを使おう】

無料アプリで、どの世代にも多く使われているのがLINEです。LINEは、無料で電話と同じように通話ができるうえ、家族や友人たちとの文字でのトークや情報交換に大変便利。一対一だけではなく、グループにできるのので写真や情報を送り合うことも簡単です。子どもさんやお孫さんが遠くにいるシニアの皆さんにとっては、繋がっているという安心手段にもなります。知り合いの一人暮らしのシニアの方は、毎朝のご飯を写真に撮って家族のグループLINEに送られるそうです。素敵な使い方だなあ〜と思います。

スマホは慣れれば慣れる程使いたくなって、例えば使うほど便利さを実感します。スマホでできる事は無限に広がっています。健康、買い物、音楽、読書、旅行、ゲームなどなど、まずはスマホを手にとって興味がある事から始めてみませんか？

※スマホの使い方についてのご質問を事務局までお寄せください。次号からの連載の参考にさせていただきます。

## ◆◆◆ サークル活動の現状 ◆◆◆

2019年には19種類のサークルが存続していましたが、コロナ禍の3年間にメンバーの高齢化が進み、多くが解散を余儀なくされました。現在は次の8種類となっています。

① フラの会	奥沢地区会（毎週月曜 13:00～）
② ハンドベル	平安教会（第2火曜 14:00～）
③ 丹田呼吸法	麹町区民館（第2・4火曜 10:30～）
④ 吹矢	吹矢協会本部
⑤ はじめての俳句	武蔵野プレイス（第3火曜）
⑥ 絵本の会	絵本セラピスト協会（第3水曜）
⑦ 民間外交	随時
⑧ 源氏物語り講読会	（休会中）

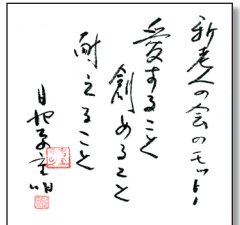
「コーラス」「今昔歩き」「いきいき健康体操」は、メンバーの高齢化により、2022年度で解散しました。「iPad教室」「自分史」は、役割を終えたことにより終了としました。ハンドベルを始めたい方、大歓迎です。「ハンドベル」「フラの会」のお問合せは、宮川ユリ子（090-8084-1848）まで。

## ■模擬患者 (Simulated Patient) ボランティア募集

模擬患者とは「患者役」として医学生や看護学生の授業や実習でお手伝いするボランティアです。8月9日に養成講座を予定しています。ご希望の方は、Eメール：midofuku945@hotmail.com、またはショートメッセージ：09068284232 福井みどりまで、①お名前②連絡先をお知らせください。



# 戦争を 考える



「戦争」が終わったとき、私は十六歳であった

岡山 禮子 (九十四歳)

私が生まれてから十六年間、昭和六年の満州事変に始まり、二十年の太平洋戦争敗戦にいたるまで日本は戦時期であった。もの心つきはじめた頃から、戦時期の学びや暮らしの中で、戦争というものに何らの疑問をもつこともなく、疎開先の女学校で安穩と過ごしていたのだった。もちろん、戦争末期になると学徒動員で農場や工場で働いたり、電車の車掌の経験もしたのであったが、八月十五日に敗戦の詔勅がラジオから日本全土に流されたとき、私は、あゝ、これで好きなことができる、上級の学校にも行かれると、飛び上がるほどの喜びを感じたのであった。しかし、その喜びの基底にはピカドン(八月六日、広島への原子爆弾投下)という現実があった。

その頃、宮島に疎開していた私は、広島から宮島へとつづく往還をトポトポと歩く被爆者たちに行き会ったことがある。上着の袖が肩から裂けてブラブラしていると見えたのは、近づくにつれ、肩からむけた腕の皮膚だと分かった。この経験は、私にとって終生忘れることができない事象となった。

終戦後、東京で暮らすことになった私が、広島平和記念資料館を訪れることができるまでに、原爆投下から三十有余年の年月が必要であった。ピカドンが成し

遂げた結末は、それほどの衝撃を与えたのである。現在の世界情勢の中で、このピカドンがもたらした結末を私たちは忘れてはならない。

## 私の戦争体験

馬場 和子 (九十二歳)

昭和二十年、私は母の故郷の佐賀市に疎開、女学校三年の勤労学徒として紡績工場で働いていました。「お前たちは鉄砲の玉だ、敵を本土に行かせるな、九州を死んでも守れ」と教官から檄を飛ばされ、軍国主義教育の中で「日本には神風が吹く。戦争には必ず勝つ」と教えられ信じ込んでいました。

八月十五日正午、天皇陛下の玉音放送。九月になって登校し友人たちと無事を喜び合いましたが、GHQの命令で教科書の不適切な箇所は墨で塗りつぶしました。ある歴史教師は「民主主義とは何ぞや」と黒板に大書して得意げに説明を始め、三カ月前まで軍国主義を教えていた同じ人間が？と衝撃を受けました。しかし、地理や理科の若い女性教師は、『星座物語』や『アンクルトム物語』を授業の代わりに読み続けてくださったのでした。

日本は今、政治の方向が私の子ども時代、少女時代に似ているように思われませんか？なぜ戦争を始めたのでしょうか？なぜ戦争を早く終わらせられなかったのでしょうか？戦争は決してしてはなりません。善良な人の心をゆがめ狂わせます。

私たちは、軍国主義の教育を受け、「平和」という言葉を全く知りませんでした。いのちの大切さなど考えてもいませんでした。悲惨で痛ましい戦争を体験してきた私たち世代は、戦争の愚かさ残酷さを語り、平和といのちの大切さを伝え続けていく使命があると思います。

## 私の中の戦争

柴山 均 (九十一歳)

ロシア軍がウクライナに侵攻してすでに一年を超えている。今日も、ウクライナのマンションでの爆弾による破壊や、防空壕の中での子どもの恐怖の顔、顔、そして、焼き尽くされた街の光景など、テレビなどで報道されない日はないほどである。昔、我が国でも全く同じような経験をしていた。

私は、久留米市の旧制中学二年生であった八月十一日の午前、敵機の襲来に遭遇した。凄まじい爆音が聞こえてきたと思ったら、ドンドンドンという轟音とビリビリとする振動に、大急ぎで裏の防空壕に、母と弟たちと四人で逃げ込んだ。しばらくして、シャーシャーという音がして焼夷弾が投下され始めた。薄暗い防空壕の中で、四人は抱き合ってたた震えるばかりであった。あの時の恐ろしさは一生涯忘れることができない。

しばらくして、あのものすごい音が消えていたので、恐る恐る外に出て仰天した。空一面が真っ赤な火の海になり、一〇メートル先の家まで火が襲いかかり燃えているではないか。我が家の前の通りでガヤガヤ、ザワザワとした音がして、人々が道にあふれ、破れ焼け焦げた服、腕から血を流している人、皆、顔は汚れ衣服は乱れ、まさに地獄の行進である。人々は、焼き尽くす火から逃れて中心部から筑後川の方に向かってただただ歩いているのである。それから、どのくらい経ったのか、夜になって火は消え、幸いにも我が家は助かった。あまりの恐怖に、その夜は全く覚えていない。人が互いに殺し合う戦争は、絶対にはならないものである。

私は、久留米市の旧制中学二年生であった八月十一日の午前、敵機の襲来に遭遇した。凄まじい爆音が聞こえてきたと思ったら、ドンドンドンという轟音とビリビリとする振動に、大急ぎで裏の防空壕に、母と弟たちと四人で逃げ込んだ。しばらくして、シャーシャーという音がして焼夷弾が投下され始めた。薄暗い防空壕の中で、四人は抱き合ってたた震えるばかりであった。あの時の恐ろしさは一生涯忘れることができない。

## 誌上句会「トキメキ句会」

選句と鑑賞 飛鳥 蘭

幼手を握り握られ磯遊び コッコ  
※お孫さんかひ孫さんか、庇っているつもりが実は庇われているのかも。  
フアゴットとピアノの対話春の宵 寛子  
※春の宵に相応しい演奏ですね。  
痩せつぱら太つちよいづれ恋の猫 夢子  
※猫も人も同じ、です。

丸窓を鳥影過る若葉光 はな子  
※丸窓ですから、寺などが想像されます。しっかりと景が描かれました。  
さくらんぼまだ生きてゐる恋敵 弘幸  
※初恋ですか。あいつ生きてるって、と今更ながら、今度は長生き競争になりそう。俳味ある一句。  
草刈や隣に父のゐるやうな 清子  
※以前は草刈の父を手伝っていた作者、草の匂い、土の匂いに父を感じているのでしょうか。

薔薇の香や久に子もゐるティタイムえり  
※馥郁とした香りの中、久々に親子が揃っての時間。気持も会話もはずむ様子が見えます。  
涼しさや東京駅の丸天井 明子  
※雑踏の東京駅、あの由緒ある丸天井には、ほっとする涼しさがあります。

梅雨の午後サックスならばフルトレン 夢里  
※梅雨の鬱陶しさが、一掃されました。  
燕子花幾度も通ふ美術館 緑  
※根津美術館ですね。花も屏風も、燕子花。

【次回のご案内】  
締切 8月20日 当季雑詠三句(夏、秋)  
メール投句 virdia@icloud.com 水口緑まで  
葉書投句 〒168-0006 4杉並区 永福4-28-124 飛鳥蘭宛  
問合せ先 090-6488-0308

## 水上バスで東京散歩

イベント報告

五月十九日十一時、両国駅で待ち合わせて、総勢十七名でスタート。まずは歩道に設置されている大鵬や白鵬などの力士像を見ながら回向院へ。ここには震災や大火の供養塔、力塚やねずみ小僧の墓などがあります。お参りを済ませて両国駅に戻り昼食。駅の隣には観光案内所や食事処があります。ちょうど五月場所中で、色とりどりの浴衣に身を包んだお相撲さんにも会えました。その後、国技館を横

にサツキの綺麗な旧安田庭園を抜けて横綱町公園へ。公園の中には東京空襲や関東大震災の犠牲者を追悼し平和を祈念する碑や慰霊堂、資料館があります。

このあと小雨のなか、右手にスカイツリーを見ながら十分ほど水上バスに乗り浅草に。三社祭で賑う浅草寺には寄らず、隅田川沿いの遊歩道を桜橋まで歩

きました。三時の言問団子までは雨も小康状態。お団子を食べながらのお喋りは



大変楽しいひと時でした。近くの「長命寺桜もち」をお土産になさる方も。この辺りから雨脚が強まり、雨宿りをしながらスカイツリーまで歩き解散しました。豪雨の中を歩いたのもまたよい思い出、楽しい一日だったとの嬉しい感想をいただきました。また、みんなどこかへ出かけましょうね。

## 「講演とコンサートの集い」へのおすすめ

日野原先生は、「音楽には、言葉では伝えられないものを伝える力がある」とおっしゃり、先生の講演には音楽を組み合わせ「新老人の会」フォーラムとして全国的に展開してきました。今回は、これを踏襲し、久しぶりに皆様が一堂に会することができるようなプログラムにしました。

◆講演は、ドキュメンタリーフォトグラファーの小松由佳さんに、「故郷を失った難民の日々～シリア、生きる根を見つめて～」と題して、お話しいただきます。

小松由佳さんは、世話人の亡き関谷真一さんと八王子で交流があり、ご縁を繋いでくださっていました。関谷さんは2021年8月に闘病の甲斐なく若くしてお亡くなりになりましたが、天国から喜んでくださっていると思います。近著に『人間の土地へ』（集英社インターナショナル/2020年9月）があります。

◆コンサートは、植村理一氏と下城瑠五子氏ご夫妻による弦楽二重奏です。

植村理一氏は、東京藝大卒業後、米国シンシナティ州立大学音楽院、演奏家コース修了、ヨーロッパ各地で演奏活動の後、2001年に帰国。ソロ奏者としてリサイタル、オーケストラにゲスト招聘されるなど、指揮、室内楽演奏・指導に携わり、現在、東京藝術大学弦楽研究部講師を務めています。「新老人の会」千葉の代表・植村研一先生のご子息様で、日野原先生がお元気なころ、よくリサイタルに来てくださったそうです。

ぜひ、周辺の方々をお誘い合わせてご参加ください。

「新老人の会」東京  
講演とコンサートの集い

2023年 9月 30日(土) 13:30～18:00  
会場：ホテルベルゲール船場 2階 参加費：1,000円

13:30～16:00  
講演 小松由佳 氏  
(ドキュメンタリーフォトグラファー)  
「故郷を失った難民の日々～シリア、生きる根を見つめて～」

16:30～18:00  
コンサート  
弦楽二重奏  
植村理一 氏 (ヴァイオリン)  
下城瑠五子 氏 (チェロ)

申し込み先：新老人の会 東京事務局  
〒102-0082 東京都千代田区一番町29-2 進興ビル4階  
TEL: 080-7310-5050 (平日10:00～15:00) FAX: 03-3265-1909

## 「俳句のすすめ」(五)

飛鳥 蘭

俳句を始めると今まで以上に季節を意識するようになります。風にも雨にも春夏秋冬を感じるのです。歳時記には例えば風は、春風、秋風というざっくりした分類に加え、それぞれの季節に、少なくとも十種以上が季語として採集されています。細長く横たわる我が国では、海沿い山沿い、太平洋側日本海側等々、地域によって独特の風の呼び名があり、また漁業や農業等に使われる名もあります。

夏の風は普通は高温多湿の南風をいいます。近畿以西では「はえ」といい、伊豆半島から日向灘辺りの太平洋沿岸や瀬戸内では「まじ」、日本海側では「くだり」、いずれも南風のことで。他に夏の風としては、あいの風、やませ、茅花流し、筍流し、青嵐、薫風、まだまだあります。

温暖化による気候変動が著しく、交通網の発達やITの普及で地域性がポードアレスになった昨今、この様な言葉は、最早歳時記の中にしか残っていないのかもしれない。とはいえ、日本人の生活を守り、育てて来た正に言葉。薄れ行く季節感を、大事にしたいものです。

## 「新老人の会」東京

2023年 会員数206人(199件)  
2022年 会員数268人(223件)

会員募集中!  
年会費

個人・家族会員 5,000円  
賛助会員 (一口) 10,000円

## 編集後記

私たちは、ウクライナの戦禍の中に生きる人々に思いを馳せ、関心を持ち続けなければと思います。8月には、78回目の終戦記念日を迎えます。巻頭言は、早乙女勝元先生がお亡くなりになった後、顧問を受け継いでくださいました早乙女愛さんをお願いしました。加えて、戦争体験をもつ90代の3人の会員に、今の思いを書いていただきました。

当会にとって、コロナ禍に被った打撃は計り知れないほどのものでした。ようやく社会がコロナ前にもどりとつづき、同封のチラシのように、小松由佳さんの講演と植村理一、下城瑠五子夫妻の弦楽二重奏の集いを開催します。講演と音楽の催しは、ほんとうに久しぶりです。会員が一堂に会する機会として、ぜひ、周辺の方々をお誘い合わせてご参加ください。